

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1993(平成5)年度

1994(平成6)年3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1993(平成5)年度



1994(平成6)年3月

豊中市教育委員会

序 文

豊中市は、大阪平野の北西部に位置し、猪名川の流れと縁深い千里丘陵によって育まれた沃野に広がり、古来より人々の生活の営みが続けられてきました。一方、今世紀初め頃からは、商都大阪のベッドタウンとして、あるいは一大交通網の要衝として開発が進められ、近代的都市として大きく変貌を遂げてまいりました。

この報告書は、平成5年度事業として国ならびに大阪府の補助を受け、豊中市教育委員会が発掘調査を実施した服部遺跡と堂池東遺跡に関するものであります。服部遺跡は弥生時代後期と中世を中心おく集落遺跡として知られ、また堂池東遺跡は近年、大阪モノレール事業地内において古墳時代から平安時代におよぶ豊富な遺構、遺物が検出された市内でも有数の集落遺跡です。以下に報告するように、今回の調査でもさまざまな知見が加えられるようになりました。

調査の実施にあたっては、諸先生方にご指導を賜り、また土地所有者、近隣の方々には文化財の重要性をご理解いただき、多大なご協力を賜りました。さらに文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。以上のような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が一層推進できますことに対し、皆様方に厚く御礼申し上げます。

「緑豊かな生活文化創造都市」を標榜する豊中市においては、まちづくりを進める上において、郷土の歴史や文化に寄せる期待が、今後益々大きくなるものと思われます。現在を生きる私達は、先人の足跡に思いを寄せてるとともに、それらをかけがえない文化遺産として、後世に永く伝えていく責務についても考え直したいものであります。

平成6年3月31日

豊中市教育委員会

教育長 青木伊織

例　　言

1. 本書は豊中市教育委員会が平成5年度国庫補助事業(総額3,000,000円、国庫50%、府費25%、市費25%)として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書である。
2. 本年度の調査は、服部遺跡、螢池東遺跡について実施した。平成5年6月7日～平成6年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を行った。
3. 発掘調査は本市教育委員会社会教育課文化財保護係が実施した。詳細は下表に記すとおりである。
4. 本書の執筆は、位置と環境および服部遺跡第2次調査の石器の項を木村　淳が、そのほかの服部遺跡第2次調査については清家　章が、螢池東遺跡第7次調査を服部聰志がそれぞれ執筆、編集した。なお、本書全般に関わる編集は服部が行った。
5. 本書の作成にあたって、泉　拓良、松山　聰、金光正裕、三宮昌弘、合田幸美、福永仲哉、杉井　健、辻　美紀氏の各氏より御指導、御助言をいただきました。また、関係各位より多くの御助力をいただきました。ここに深く感謝いたします。
6. 各調査区の土地所有者、施工業者、ならびに近隣の住民の方々には、文化財に対して深い御理解と御協力をいただきました。あわせてここに記し、感謝の意を表します。

遺跡名	調査地	調査面積	担当者	調査期間
服部遺跡	2次 曽根東町5丁目56,57	247m ²	清家 章	平成5年6月7日～8月5日
螢池東遺跡	7次 螢池中町3丁目109-2	76m ²	服部聰志	平成5年10月4日～11月17日

目 次

第I章 位置と環境 1

第II章 服部遺跡第2次調査

1. 調査の経緯.....	3
2. 過去の調査.....	4
3. 調査の成果.....	4
(1) 調査の方法と基本層序.....	4
(2) 検出した遺構.....	4
(3) 出土遺物.....	8
4. ま と め.....	12

第III章 萩池東遺跡第7次調査

1. 調査の経緯.....	13
2. 遺跡の立地と過去の調査.....	13
3. 調査の成果.....	16
(1) 基本層序.....	16
(2) 検出した遺構と遺物.....	17
4. ま と め.....	24

図版目次

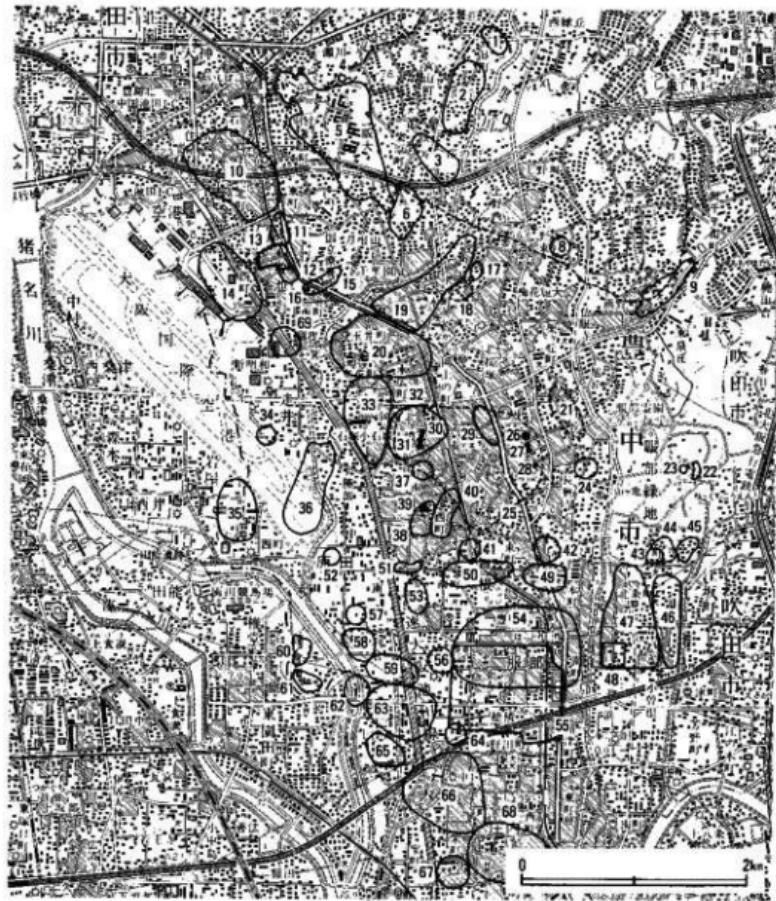
図版 1 服部遺跡第2次調査地点	(1)B区遺構検出状況（西から） (2)B区遺構完掘状況（西から）
図版 2 服部遺跡第2次調査地点	(1)獨立柱建物1（北から） (2)十層断面
図版 3 服部遺跡第2次調査地点	(1)A区全景（北から） (2)溝2（西から）
図版 4 服部遺跡第2次調査地点出土遺物	
図版 5 服部遺跡第2次調査地点出土遺物	(1)包含層出土遺物 (2)繩文土器
図版 6 服部遺跡第2次調査地点出土遺物	(1)石器 (2)石器

- 図版7 蛍池東遺跡第7次調査地点
- 図版8 蛍池東遺跡第7次調査地点
- 図版9 蛍池東遺跡第7次調査地点
- 図版10 蛍池東遺跡第7次調査地点
- 図版11 蛍池東遺跡第7次調査地点
- 図版12 蛍池東遺跡第7次調査地点
- 図版13 蛍池東遺跡第7次調査地点出土遺物
- 図版14 蛍池東遺跡第7次調査地点出土遺物
- (1)遺構検出状況全景(西から)
 (2)遺構完掘状況全景(西から)
 (3)竪穴式住居1全景(西から)
 (2) 同 貼床除去後(西から)
 (1)竪穴式住居1 周溝内板壁の痕跡
 (2) 同 周溝と杭列
 (3) 同 須恵器杯身出土状況
 (4) 同 柱穴断面
 (1)竪穴式住居3全景(南から)
 (2) 同 遺物出土状況
 (1)竪穴式住居3 覆土断面(西から)
 (2) 同 貴床断面(南西から)
 (1)溝1全景(南から)
 (2)調査区南端土層断面

挿図目次

第1図 周辺の遺跡分布図(1:50,000)	vi
第2図 周辺地形図(1:25,000)	2
第3図 調査範囲図(1:400)	3
第4図 調査地点位置図(1:5000)	3
第5図 調査風景	4
第6図 溝2 橫瓶出土状況	4
第7図 調査区平面図・断面図(1:80)	5~6
第8図 掘立柱建物1(1:50)	7
第9図 溝2断面土層図(1:30)	7
第10図 遺構出土遺物(1:4)	8
第11図 包含層出土遺物(1:4)	9
第12図 繩文土器(1:2)	10
第13図 石器(2:3)	11
第14図 調査範囲図(1:300)	13
第15図 調査地点位置図(1:5000)	13
第16図 第3次調査地点 溝	14
第17図 溝 遺物出土状況	14

第18図	第7次調査地点位置図	15
第19図	調査区平面図・断面図	16
第20図	包含層出土遺物（1：4）	17
第21図	竪穴式住居1 平面図・断面図（1：60）	18
第22図	炉断面	18
第23図	出土遺物（1：4）	19
第24図	竪穴式住居2、3 平面図・断面図（1：60）	20
第25図	竪穴式住居3 遺物出土状況（1：20）	21
第26図	竪穴式住居3 出土遺物（1：4）	22
第27図	出土遺物（1：4）	23



1. 野村森古跡跡
2. 少野古跡
3. 内門遺跡
4. 井東古跡跡
5. 御東山古跡
6. 菊原遺跡
7. 横井谷古跡跡
8. 上野遺跡
9. 雷村跡跡
10. 墓池北古跡
11. 墓池東古跡
12. 畠山遺跡
13. 萩田遺跡跡
14. 安施西古跡
15. 南引領山古跡
16. 神神山古跡
17. 今寺山古跡
18. 新光岡古跡
19. 本町遺跡
20. 斎光跡
21. 下那麻古跡
22. 須輪飛灰塗
23. 佐藤古塗
24. 長野寺古跡
25. 板塚古跡跡
26. 大塚古塗
27. 開原子塚古塗
28. 山田平塚古塗
29. 朝日塚古跡
30. 小石塚古塗
31. 大石塚古跡
32. 開輪飛灰塗
33. H.ノ山遺跡
34. 丸井遺跡
35. 京西古跡
36. 春雲古跡
37. 駒形山古跡
38. 朝日塚跡
39. 朝日塚跡
40. 朝日塚跡
41. 望櫻水飛跡
42. 地上遺跡
43. 石室寺発跡
44. 若竹町遺跡
45. 丹生遺跡
46. 北条遺跡
47. 小舟組遺跡
48. 金屋西遺跡
49. 丹波日代今西家屋敷
50. 朝日北古跡
51. 朝日元町遺跡
52. 旗出中町遺跡
53. 皆無南古跡
54. 旗所遺跡
55. 旗後村御塗
56. 旗部西遺跡
57. 旗倉北古跡
58. 利舟遺跡
59. 利吉南遺跡
60. 利舟遺跡
61. 札曾西遺跡
62. 上津島町南遺跡
63. 上津島遺跡
64. 旗宿原ノ坂遺跡
65. 上津島南古跡
66. 馬江遺跡
67. 鳴江遺跡

第1図 周辺の遺跡分布図 (1 : 50,000)

第Ⅰ章 位置と環境

位置 豊中市は大阪府の北西部に位置し、西は兵庫県と接している。北部には待兼山、島熊山などからなる千里丘陵がひろがり、その南西の市域中央部には低・中位段丘層からなる豊中台地、西部から南部にかけては沖積平野がひろがる。今回調査を行なった服部遺跡は沖積平野の北端部分に位置し、すぐ北方には豊中台地がひろがっている。螢池東遺跡は千里丘陵低位段丘の西南部分に位置し、すぐ西側には西摂平野がひろがっている。

歴史的環境 豊中市のほぼ全域に遺跡が分布しており、しかもそれらは旧石器時代から江戸時代にいたるまでの広範な時期を網羅している。ここでは今回調査対象となった服部遺跡と螢池東遺跡について簡単にふれる。

服部遺跡は、弥生時代を中心とし、平安、室町時代にわたる複合遺跡であることが第1次調査によって明らかになっている。弥生時代以前については、服部遺跡の南側に位置する穂積遺跡で貝殻を含む海成層から縄文時代中期の深鉢の破片がみつかっており、縄文海進時にこの付近は海がひろがっていたことが確かめられている。東側に位置する小曾根遺跡でも縄文時代晚期の深鉢の破片が出土していることから、付近の沖積平野部あるいは台地の縁辺部分に縄文時代の人々の生活の痕跡がみつかる可能性が考えられていた。弥生時代になると、まず小曾根遺跡に集落が現われ、後期には服部遺跡のほか周辺の北条遺跡、穂積遺跡でも集落が形成される。

つづく古墳時代にも服部遺跡の周辺では集落が営まれている。前期末から中期にかけて北方の豊中台地上に桜塚古墳群が造られ、後期には沖積平野部の穂積遺跡でも古墳が築かれる。その後も周辺の小曾根、北条、穂積遺跡など広い範囲にわたって集落が形成されていく。

螢池東遺跡は、周辺で国府型ナイフ形石器が出土していることから、市内でも最も早く人間の営みがあった地域に含まれる。弥生時代中期になると螢池東遺跡の北側に位置する螢池北遺跡（宮ノ前遺跡）では拠点的な集落が営まれるが、螢池東遺跡におけるこれまでの調査では弥生時代後期から古墳時代の遺構が中心で、それ以前のものはみつかっていない。鰯大阪文化財センターが実施した第5・6次調査では、古墳時代中期の遺構として、作り付け窓をもつものを含む竪穴式住居跡25棟などとともに、法円坂遺跡や鳴滝遺跡の大規模倉庫の規模に匹敵する大型掘立柱建物2棟がみつかり注目されている。またこの時期、螢池北遺跡の南側部分で小円墳で構成される古墳群が営まれている。

つづく奈良から平安時代にかけては螢池東遺跡、螢池北遺跡で律令集落が形成される。これらの地域は古代から官道である西国街道や能勢街道が近くを通り、猪名川、千里川の水運に恵まれた、古くからの交通の要衝であったことが想像できる。



第2図 周辺地形図 (1 : 25,000)

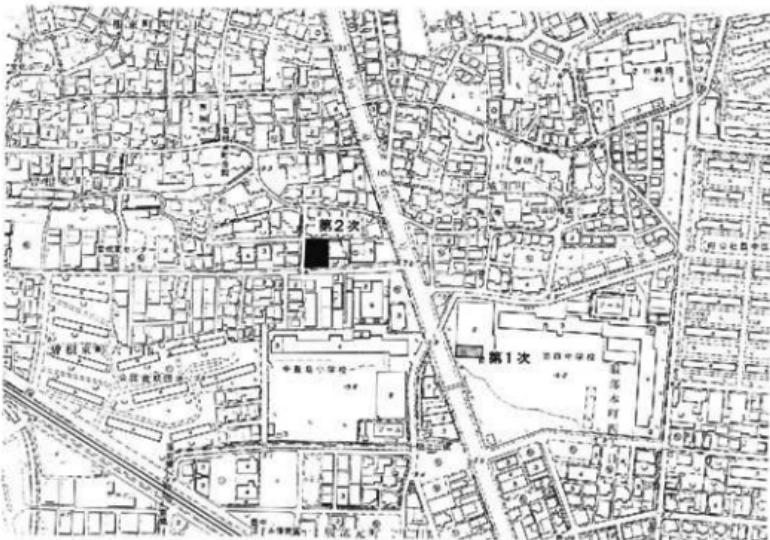
第II章 服部遺跡第2次調査

1. 調査の経緯

調査地点は豊中市曾根東町5丁目56、57番地に所在する。今回共同住宅建築の申請が行われ、当地が服部遺跡の範囲内にあることから、あらかじめ立会調査を行ったところ、包含層と遺構が検出されたため、事前調査を行う運びとなつた。申請された建物には営利目的の共同住宅と個人住宅の両者が含まれていたため、延面積から個人住宅が占める面積を按分し、個人住宅の部分のみ国庫補助費から調査費を支出した。残りの費用は原因者の負担により調査は行われた。



第3図 調査範囲図 (1 : 400)



第4図 調査地点位置図 (1 : 5000)

2. 過去の調査

服部遺跡ではこれまでにも調査が行われている。第1次調査地点は今回の調査地点から南東0.6kmに位置する現豊中市立第四中学校体育館の南側部分である。この第1次調査では弥生時代後期の包含層と土坑群、鎌倉時代に属する井戸などが検出され、服部遺跡が弥生時代から鎌倉時代まで続く複合遺跡であることが判明したのである⁽¹⁾。

3. 調査の成果

(1) 調査の方法と基本層序

調査地点には排土をおくスペースが少なく、調査区内全面を同時に掘り下げるとは困難な状況であった。そのため調査区を第3図のようにAおよびB区の2つに分割し、先にA区を調査した後、A区を排土置場としてB区を調査することにした。

当調査地点の基本的な層序は5層に分けることができる(第7図)。上から盛土、耕作土、床土、包含層、遺構面、遺物を含まない砂層である。包含層はさらに2つ(7層、8層)に分けることが可能であるが、各層に含まれる遺物に差異は認められないため一括して扱う。9層の上面は古墳時代後期の遺構面である一方、9層自体が縄文時代の遺物を含む包含層である。

(2) 検出した遺構

B区では9層上面から溝1、掘立柱建物1と多数のピットが検出された。掘立柱建物1(第8図)は桁行3間、梁間2間の総柱構造の建物で、その規模は桁行4.0m、梁間3.0mである。柱穴の掘形の形は不揃いで、方形のものと円形のものが混在する。柱痕の大きさはほぼ一定しており直径約20cmである。建物の主軸はほぼ真北である。ピットの掘形内から須恵器片が数点出土しており、後述するとおりTK43型式⁽²⁾、桜井谷窯跡編年II型式4段階⁽³⁾に属する。

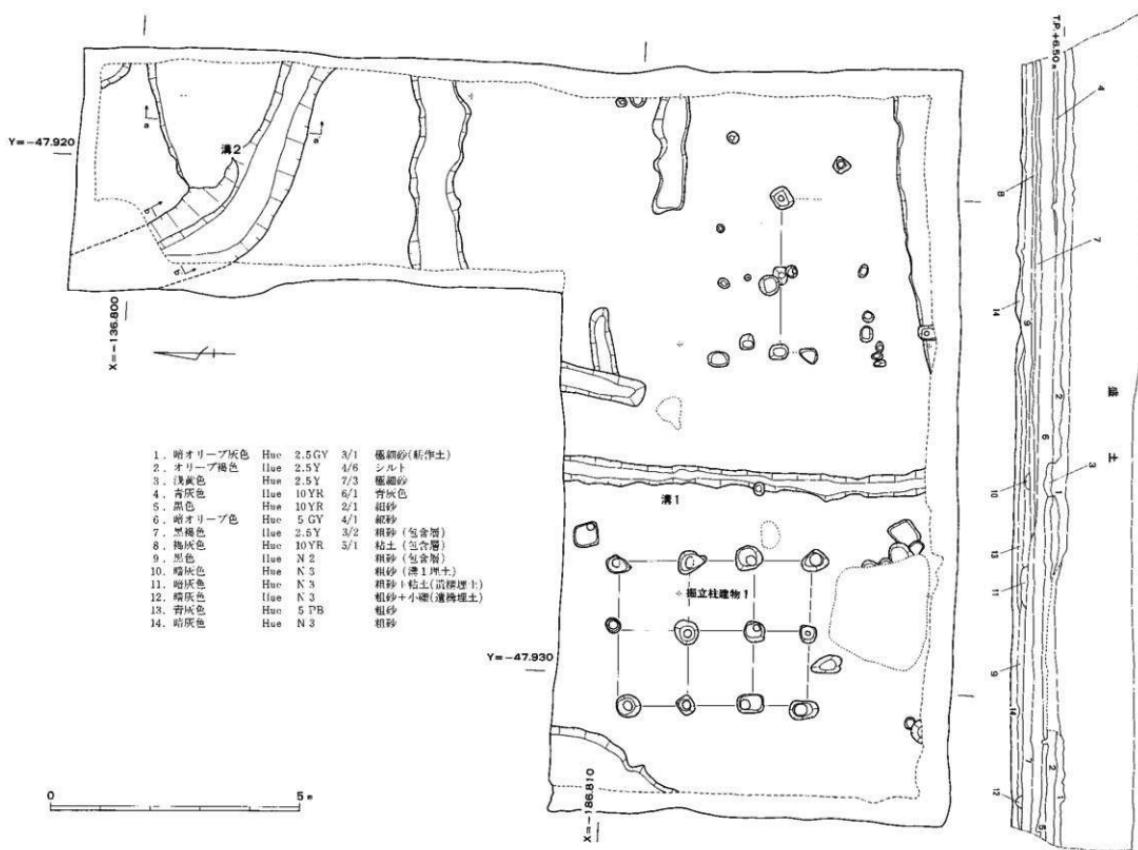
溝1はB区のほぼ中央を南北に走る幅40cm、深さ約15cmの溝である。掘立柱建物1の東側約



第5図 調査風景



第6図 溝2 横瓶出土状況

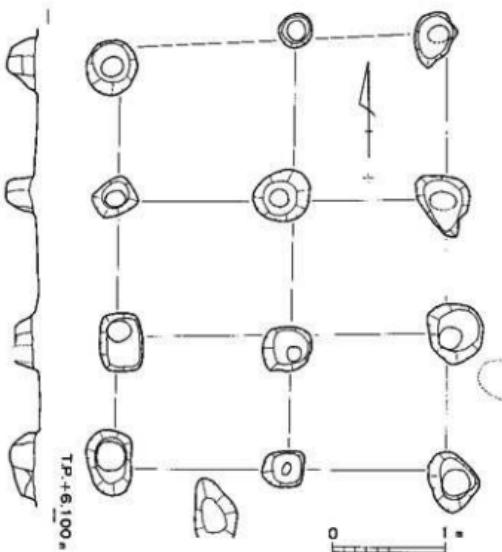


第7図 調査区平面図・断面図 (1:80)

1.5mに位置し、掘立柱建物の主軸とほぼ平行している。溝1からも上部器片と須恵器片が出土しており、その遺物と掘立柱建物1の遺物との間に時期差は認められない。このことから溝1と掘立柱建物1は同時に併存していたものと考えられる。

溝1の東側からも複数のピットが検出されている。調査区の北西から南東に向かって遺構面は徐々に低くなっている。部分的に遺構が削平されたものと思われる。そのため溝1の東側では、明確な建物跡を検出することができなかった。ただ、ピットの存在から溝1をはさんで2棟以上の掘立柱建物が存在していた可能性はきわめて高い。溝1はこうした複数の建物の敷地を区切る境界の溝である可能性がある。

A区からは溝2が検出された。溝2は調査区の北部に位置する幅約1.5~3.6mの溝である。A区の東端からA区北隅に向かって船を狭めながら逆S字に屈曲する。溝の肩部から横瓶の破片がまとまって出土した(第6図)。溝の性格は不明である。この他にも数条の溝状遺構が検出されているが、人為的に掘削されたものか遺構而の自然な窪みか不明である。



第8図 掘立柱建物1 (1:50)

1. 黒褐色 Hue 7.5Y 3/1 細砂
2. 棕灰色 Hue 10YR 4/1 シルト
3. 灰褐色 Hue 10YR 6/2 粗砂
4. 褐灰色 Hue 5YR 6/1 シルト
5. 棕灰色 Hue 10YR 4/1 細砂

6. 黒色 Hue 2.5Y 2/1 シルト
7. 黒褐色 Hue 10YR 2/3 シルト
8. 黒色 Hue 2.5Y 2/1 粘土
9. 黑褐色 Hue 10YR 3/6 粗砂



第9図 溝2断面土層図 (1:30)

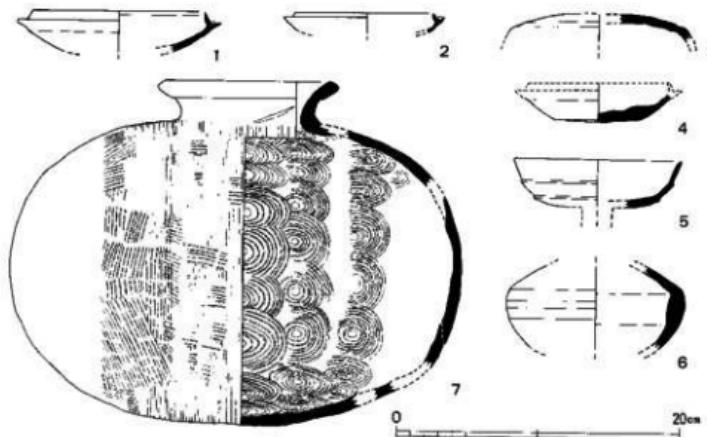
(3) 出土遺物

遺構出土の遺物(第10図) 1、6、7は溝2から出土した遺物である。1は須恵器の杯身で、口縁部径13.5cm、残存高2.5cmで、立ち上がりの高さは1cmである。内外面ともに回転ナデで調整されている。6は台付長頸壺の胴部と思われる個体である。最大胴径12.5cmである。胴部下半は回転ヘラケズリが施されており、内面はナデ調整である。7は横瓶である。溝2の肩部からまとまって出土した個体である(第6図)。口縁部径11.5cm、器高24.5cm、胴部最大幅32cmである。外面は平行タタキの後カキメ調整が行われている。内面は同心円タタキが整然と施されている。頸部にはヘラ記号が記されている。胴部の一方の端は直径10.5cmの粘土板で蓋をするように塞がれている。

溝1からは蓋杯(2、3、4)が出土している。2、4は杯身である。両者は共に細片であるので不明な点が多いが、口縁径は10cm未満でヘラケズリは底部のごく一部にのみ施されている。3は杯蓋である。口縁部が失われているが、口縁径はおそらく13cm以上になると思われる。残存部位にはヘラケズリは認められず、ナデ調整が施されている。

5は無蓋高杯の杯部で、掘立柱建物1の柱穴掘形から出土したものである。口縁部径12cm、脚部の高さ3.2cmである。内外面ともに回転ナデによって調整されている。

これら遺構出土の遺物は概ねTK-43形式²⁷、または桜井谷窯跡編年のII型式4段階²⁸の範疇に属するものと考えられる。



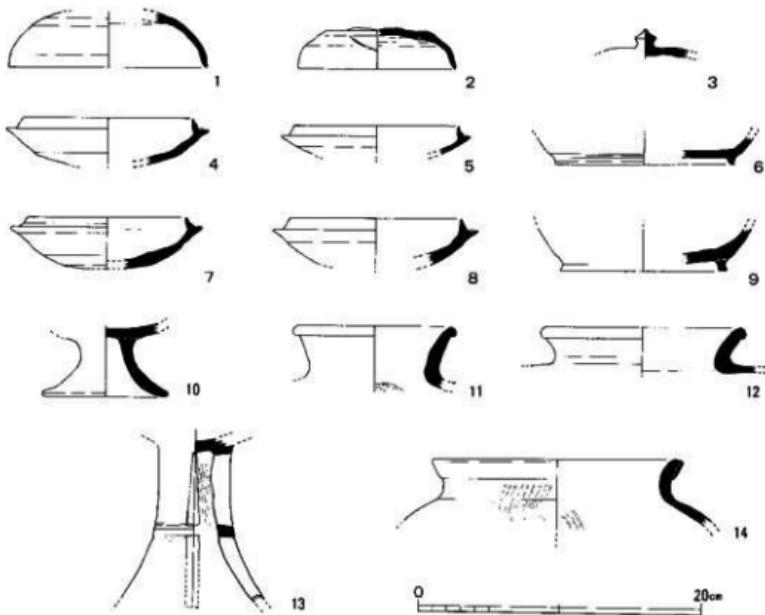
第10図 遺構出土遺物(1:4)

包含層出土遺物（第11図） 包含層（第7図7、8層）から出土した遺物の大部分は古墳時代後期から奈良時代にわたる須恵器片である。そのほかに少数ながら埴輪片、弥生土器片、縄文土器片と石器が出土している。縄文時代に属すると思われる遺物は先述のように9層からも出土しており、その所属時期も同じであるので、後で一括して報告することにする。

杯蓋には玉珠つまみを持たない個体（1、2）とつまみを持つ個体（3）がある。1の口縁部径は14cmで、天井部はなだらかなカーブを描き、口縁部はまるくおさまる。内外面ともに回転ナデによって調整されており、残存部にはヘラケズリは認められない。2の口縁部径は11cmである。天井部は未調整で粗雑な造りである。天井部から口縁にかけてはナデ調整が施され、口縁端部はまるくおさまる。天井部下半にはヘラ記号が記されている。

4、5、7、8は須恵器の杯身である。口縁部径は9～12cm、復元高3～4cmで、立ち上がりは1cm以下である。口縁端部はまるくおさまる。回転ヘラケズリは底部の1/3以下に施されている。

6、9は高台を有する杯身である。高台の直径はそれぞれ12.4cm、11.6cmあり、高台は底部端に近い位置に貼付されている。内外面には丁寧な回転ナデ調整が施されている。



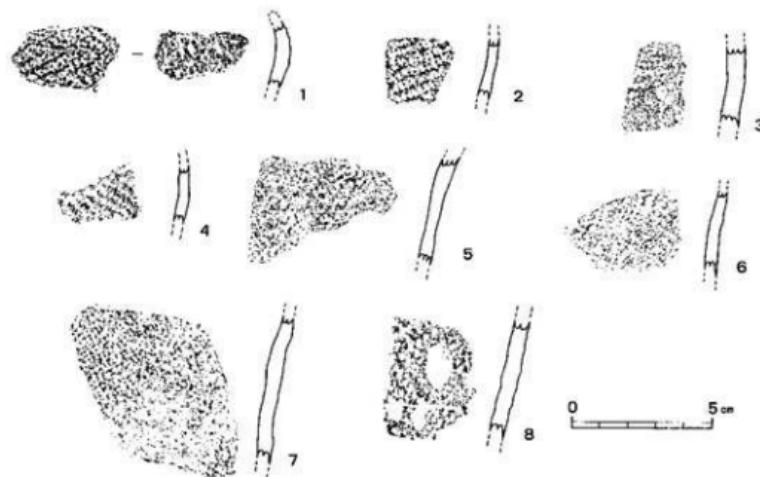
第11図 包含層出土遺物（1：4）

10は短脚高杯の脚部である。脚部に透かしを持たず、内外面ともにナデ調整が施されている。砂粒を多く含み粗雑な胎土である。13は長脚高杯の脚部である。脚部中央に2本の凹線が配され、凹線をはさんで2段の長方形透かしが2方向に穿たれている。外面調整は回転ナデ調整が施され、内面上半部には粘土のしづり痕が明瞭に認められる。

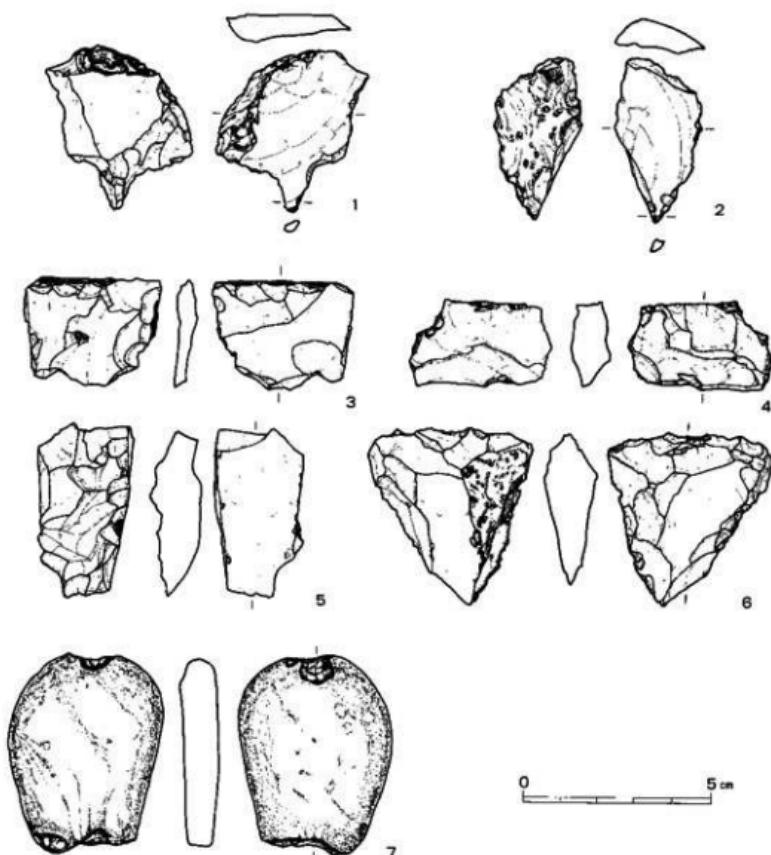
11、12、14は口縁部径11~17cmの小形甕の口縁である。3個体とも内面には同心円タタキを残しており、14は外面に平行タタキが認められる。いずれの頸部も短く外反し、11、12の口縁部は折曲げてまるくおさまる。14は薄く幅広い粘土帯を口縁に取り付け、口縁部を肥厚させている。

縄文土器（第12図） 縄文土器には上記の須恵器などとともに第7、8層から出土したものと縄文時代の遺物しか含まない第9層から出土したものの2種類がある。

出土した縄文土器は十数片である。そのうち比較的の遺存度の良い8点を図示した。4、6が第9層から出土したもので、それ以外は第7、8層から出土した。図示した全ての個体の外面には羽状縄文が認められる。第12図-1は口縁と考えられるが、端部は欠如している。表面には羽状縄文が、裏面には爪形文が見られる。7は胴部下半の破片であると思われる。外面にはLR縄文が施されている。これ以外の破片も胴部と思われる。2、3、6の個体にはRL縄文が認められる。また、5の上段の縄文の燃りはLRで下段はRLである。羽状縄文は縄文時代前期に特有な文様であり、これらの土器は北白川下層式に属するものと思われる。



第12図 縄文土器 (1 : 2)



第13図 石器 (2:3)

石 器 刨片 4点、二次加工のある刨片 3点、ドリル 2点、ビエス・エスキュー 4点の計13点が出土している。これらはいずれもサヌカイトを素材として製作されている。このほか石鍤も出土している。ここではトゥールのみを図化した。

第13図-1・2はドリルである。1は二次加工のある刨片を素材としており、先端部に粗い加工を施して錐部を作り出している。また、錐部に二次加工の際のものとは考えられない微小剝離が認められる。2は横長刨片のバルブを折り取って右端部に錐部を作り出している。錐部に対して背腹両面から加工を施しているほか、折れ部に対しても剝離が認められ、使用痕の可

能性が大きい。背面に風化の進行した自然面が多く残っている。

3～6はいずれも使用にともなうものと考えられる破損がみられる。3はビエス・エスキューである。主要剝離面が平坦で縁边上に階段状の小剝離および潰れが連続的にみられる。4・5・6はいずれも対向する刃が欠失しているため断定はできないが、ここではビエス・エスキューとして扱った。4の背面には破損の際の主要剝離面が広く残っている。6は背面の左縁辺全体が節理面にそって複雑に破碎している。破損後も剝離が認められ、継続した使用が行なわれたものと考えられる。

以上トゥールのほか、剝片のうち1点には微小剝離が認められる。ほかの2点はチップで、1点は碎片である。二次加工のある剝片のうち1点はバルブを除去するように小さな剝離が連続的に施されている（図版6-2）。

7は重量約37gの石錐で両端から打ち欠きによる刻みが認められる。河原石（砂岩）を利用したものであると考えられる。

4. ま と め

今回の主な調査成果をまとめるならば以下となる。

①これまで脇部遺跡では知られていなかった古墳時代後期の集落の存在が確認された。検出した建物は1棟のみであるが、敷地を区画すると思われる溝が調査区の外へ続くことから、集落は調査区の外に広がっているものと思われる。

②これまで、豊中市における縄文時代中期以前の遺物は、わずかに数点の石器が知られるのみであった。今回石器と共に北白川下層式に比定される土器片が出土し、縄文時代前期においても豊中市に人間が生活を営んでいたことが改めて確認された。

以上のように、今回の調査ではこれまで知られていなかった新たな知見を得ることができ、きわめて有意義な調査となった。遺構は調査区の外に広がっていることは確実であり、周辺の開発には慎重な対応が必要であると考えられる。

註

- (1)木下亘編『脇部遺跡発掘調査報告書』脇部遺跡調査会、豊中市教育委員会、1986年。
- (2)田辺昭三『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ、1966年。
- (3)木下亘「根津桜井谷窯跡群における須恵器編年」(柳本照男編『桜井谷窯跡群2-17空跡』少路窯跡群調査会、1982年)。

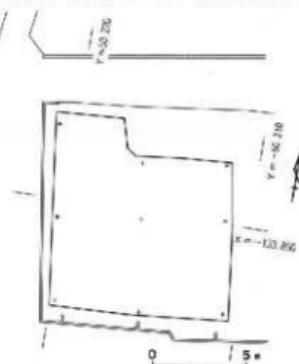
第III章 蛍池東遺跡第7次調査

1. 調査の経緯

1993年6月、螢池中町3丁目109-2における住宅兼事務所の建築確認申請が、市に対して提出された。教育委員会社会教育課では、現地が螢池東遺跡の範囲に含まれること、予定される建物の基礎によって造構が損壊を受ける可能性があることから、施主側と協議を行い、事前の発掘調査を実施することとなった。調査は、予定される建物が専用住宅部分を含む事務所であるため、各々の床面積から調査経費を按分し、専用住宅部分を国庫補助金の対象とし、残りの営利目的にかかる部分については施主側の負担によるものとした。

2. 遺跡の立地と過去の調査

螢池東遺跡は、豊中市北部の丘陵部末端に位置する弥生時代後期から中・近世にわたる複合遺跡である。



第14図 調査範囲図 (1:3000)



第15図 調査地点位置図 (1:5000)

当遺跡周辺の地形をやや細かく見ると、阪急石橋駅と螢池駅の東方には、標高120mの待兼山を最高所とする通称待兼山丘陵が広がり、遺跡はこの丘陵の最も西端部に位置する。待兼山丘陵は、主として大阪層群をおおう高位、中位、低位の各段丘層からなるが、北は箕面市との境界付近に走る断層により、また南は千里川によって画され、独立塊状の様相を呈する。この丘陵の西端に広がる低位段丘上、旧山所池（市立第十八中学校）に向かって張り出す舌状台地の突端付近に遺跡は立地している（第2図）。

当遺跡では、これまでに6次の調査が行われている。1988年の第1次調査から1992年の第4次調査までは、おもに阪急宝塚線と国道176号線の中間地点において、会社ビルや共同住宅建設の事前調査として行われたもので、弥生時代後期から平安時代頃までの建物跡や溝などが検出されている。しかし、検出遺構の密度は阪急宝塚線側に高く、国道側に薄いことや、周辺で実施した他の試掘所見からも、当遺跡の範囲はほぼ176号線を東限とするものであったらしい。

一方、阪急宝塚線の西側に計画されている大阪モノレール建設に先立って、鶴大阪文化財センターが1992年より実施している第5、6次調査では、古墳時代前期末～中期前葉の大型掘立柱建物群、作り付けのカマドをともなう竪穴式住居跡の他、奈良時代から平安時代にかけての建物群などが広範囲にわたり検出された。以上の成果によれば、当集落跡の中心は、概ね螢池駅から北方の、阪急宝塚線と旧山所池に挟まれた範囲の中に求められるものと推定される。またこの調査で検出された遺構群の中でも、とくに古墳時代前期末～中期の大型掘立柱建物群は、一棟の占有面積において、ほぼ同時期とみられる難波宮下層遺構、和歌山県鳴滝遺跡などに匹敵し、古墳時代における当該地域の重要性を示す貴重な成果といえる。



第16図 第3次調査地点 溝



第17図 溝 遺物出土状況

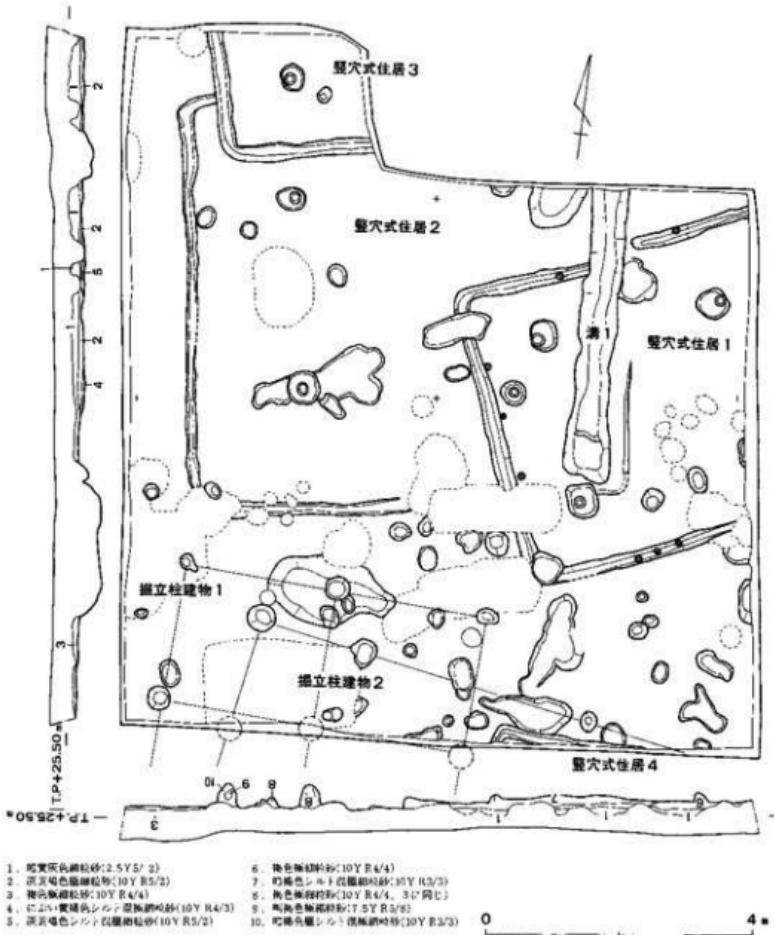


第18図 第7次調査地点位置図

3. 調査の成果

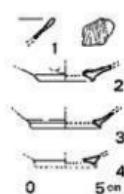
(1) 基本層序

調査地点周辺は、現在のように市街化が進む以前には、田畠などに利用されていたようで、住宅建築とともに厚い擾乱土層の下には、当時の耕作土および床土層が切れ切って観察され



第19図 調査区平面図・断面図

る。調査区の南西部には、この耕作土層の下に瓦器片（第20図）などを含む中世の包含層（層厚約10cm）が、削平を免れて残存していた。また、この中世包含層直下の地山面において古墳後期と中世の遺構が同時に検出されると、古墳後期の竪穴式住居の深度が概して浅いことから、おそらく13世紀代に、それまでに形成されていた包含層や地山面そのものを削平するような、比較的規模の大きな開発が行われたものと推定される。なお最終遺構面は、現地表からマイナス50cmで、標高はT.P.プラス25.50mである。



第20図
包含層出土遺物

(2) 検出した遺構と遺物

第7次調査地点で検出された遺構は、約76m²という狭い調査面積にもかかわらず密度は高く、その内訳は、竪穴式住居4棟、掘立柱建物2棟、溝1条、落ち込み5ヶ所、ピット23個であった。遺構の時期は、概ね6世紀末から7世紀初頭と、13世紀代の2時期に分かれる。

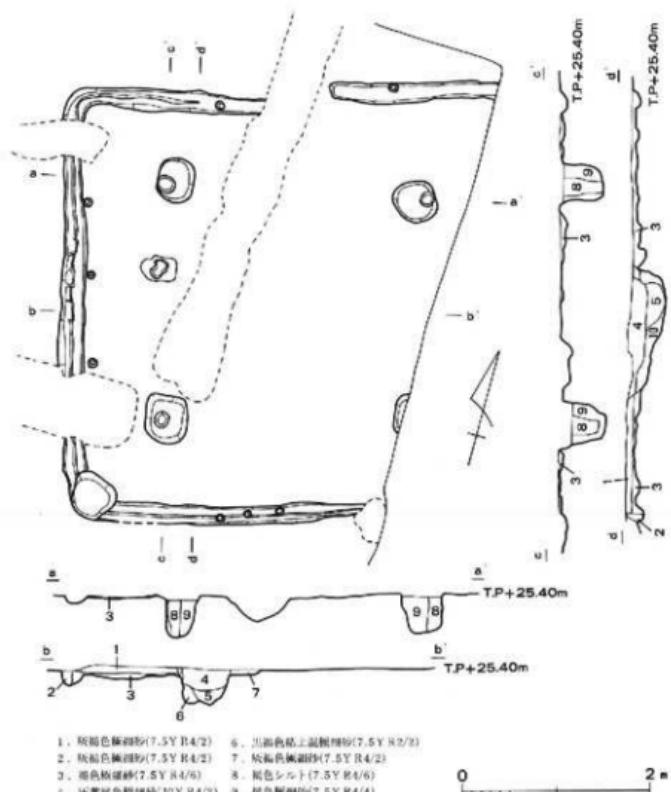
竪穴式住居1 調査区の東側から検出された住居跡で、床面積の約6分の5が調査の対象となった。東西約5m（推定）、南北4.65mの、やや東西に長い方形プランを呈する竪穴式住居である。

覆土：住居全体が後世の削平を受けていたため、覆土の厚さは8cm以下しか残っていなかった。土質は灰褐色粘質土を主体に、地山の小礫を含むものであった。

周溝：幅約20cm、深さ10～20cmを測る。北辺の周溝は中央付近にて途切れており、出入口の可能性を示す。ただし、溝1と重複するため、正確な幅は計測不能。周溝の覆土は、内側と外側で大きく土質を異にする。すなわち、外側（壁側）には、暗褐色土が約10cmの幅ではば垂直にたまるのに対し、内側（床側）には、地山の黄色粘土ブロックを多量に含み、人為的な埋め戻し土とみられる。また仔細な観察の結果、西辺の周溝中央付近にて、幅15～20cm、厚さ10cm前後の、板を思わせる痕跡が認められたことから、おそらく当周溝は、板壁をつくるための掘形で、覆土の差は、板壁の痕跡、および埋め戻し土と考えられる。

杭列：周溝の内外に打ち込まれた、直径5cm前後、深さ15～20cmの杭跡である。住居跡北辺の周溝内に2ヶ所、西辺の周溝の外側に3ヶ所、南辺の周溝内に3ヶ所が検出された。杭間の距離は必ずしも一定していないが、西辺では0.8～1m、南辺では30cm前後と、各辺ごとにやや近似した傾向を示す。また各辺とも、辺の中央付近に偏る傾向を示す。いずれも周囲の板壁の崩落を防ぐために打ち込まれた補助材と考えて差し支えないものと考えられる。

柱穴：住居床面の各コーナー付近にて検出された、4本柱の柱穴である。形状は、円形に近いもの、方形に近いものなどがあり、規模は直径40～50cm、深さ40～50cm。全体を検出した3ヶ所の柱穴では、いずれも直径15cm内外の柱痕が明瞭に観察され、それによると芯心間の距離は北辺2.8m、西辺2.5mを測る。周溝の長さと同様、やや東西に長い住居の形状が復元される。



第21図 穴式住居1 平面図・断面図 (1:60)



第22図 炉断面

炉跡：住居床面の西側に偏して設けられた地床式の炉跡である。西辺2カ所の柱穴間の、中央よりやや北側につくられている。東西40cm、南北25cmの範囲で床面が赤褐色に熱変しており、その中心付近に、直径20cm前後、深さ4cm程のいびつな形のくぼみが存在する

貼床：住居の西側部分に限って、厚さ7cm未満の貼床が認められた。地山の黄色粘土と暗褐色土のブロックからなる。柱穴と炉跡は、この貼

床の上面より掘り込まれたものである。一方、周溝については、外側の板壁痕跡が貼床上面において検出されたものの、内側の周溝掘形は、貼床除去後の地山面において検出された。このことから、おそらく当周溝は住居床面掘削と同時に掘り込まれたものと推定される。

出土遺物（第23図）：住居跡の残存深度が浅く、出土した遺物の量もわずかであった。ただし、柱穴3の南側の床面直上にて出土した須恵器の杯身は、当住居の存続時期を明らかにする上で重要なものである。

1、2は、残存する覆土の上部にて出土した。杯蓋の頂部付近の破片で、いずれも径15cm前後を測るものと推定される。外側の回転ヘラケズリは、いずれもシャープで幅広く、3に比べると古い特徴を示す。出土状況から混入の可能性の高いものである。3は、床面直上にて出土した杯身で、受部径12.5cm、器高3.2cm。浅くて丸い体部から受部が水平にのび、短く内傾する口縁部を有する。回転ヘラケズリの範囲は体部の約3分の2で、それ以外は内、外とも丁寧な回転ナデ調整が施される。焼成は良好である。受部径や口縁部の特徴から、およそ第II型式5、6段階（陶色編年）の過渡期頃に対応するものとみられる。

竪穴式住居2 調査区中央の北側で検出した住居跡である。北端の一部を除き、床面積の約8割を調査した。東西6.62m、南北6.4mの、ほぼ正方形のプランを尾する。後世の削平のため、全体に残存状況は悪い。炉跡に相当する熱変部分も検出されず、擾乱により消滅したものとみられる。

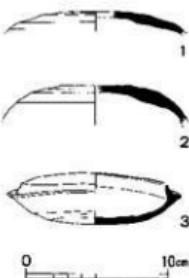
覆土：住居北側中央、および東西コーナー付近にのみ残存していた。地山の小砾を含む暗褐色土である。南西コーナー付近の覆土上層より、須恵器高杯の破片が1点のみ出土した。

周溝：幅12～22cm、残存する深さ7cm未溝を測る。覆土は、住居全体の覆土と同じ暗褐色土である。概して残存状況が悪く、住居跡1で推定された板壁の痕跡などを検出することはできなかった。

柱穴：住居1と同様、4本柱の柱穴である。掘形の形状はいずれも円形で、直径40～48cm、深さ30～35cmを測る。3カ所の柱穴には、直径15cm前後の柱痕が明瞭に観察され、それによると、芯心間の距離は、東西3.2m、南北2.9mを測る。住居1と同様、やや東西に長い住居形態が復元される。

貼床：住居跡北西コーナーにおいて、厚さ10cm程度の貼床が認められた。それ以外の部分については、削平のため明らかではない。

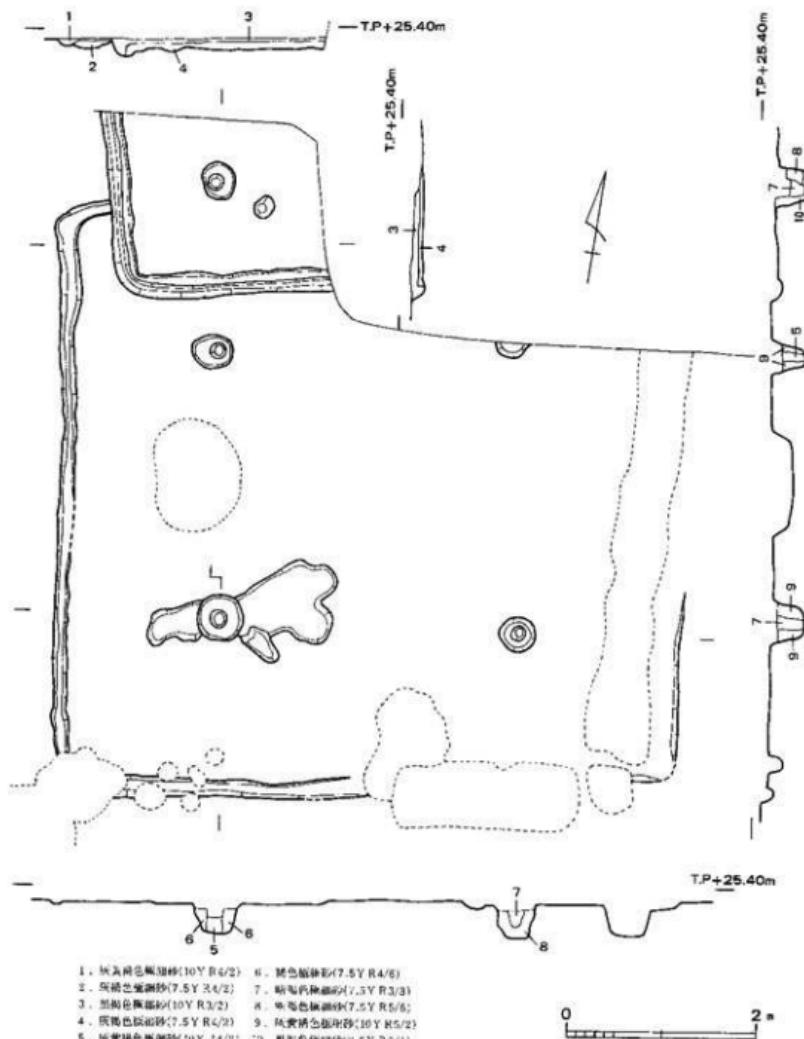
出土遺物：覆土上層より出土したもので、長脚2段の有蓋高杯の破片とみられる（第27図3）。



第23図 出土遺物

第三章 番池東遺跡第7次調査

残存高7cm、脚柱部の径3.9cmで、3方に幅のせまいスカシ孔が開けられる。第2型式の4、5段階頃に対応するものと見られるが、出土遺物はこれ1点のため、必ずしも当住居の時期を示



第24図 穴式住居2、3 平面図・断面図 (1:60)

すものとすることはできない。

竪穴式住居3 調査区の北西部にて検出した住居跡である。床面積の約4分の1を調査したにすぎず、全体の規模は不明。ただし、柱穴、周溝間の距離からすれば、住居跡1、2の中間的な規模、すなわち…辺5.8m前後の規模が想定される。土層の堆積状況、遺物の出土状況から、住居2よりも新しいものと思われる。今回検出した住居跡の中では、比較的残存状況の良いものである。

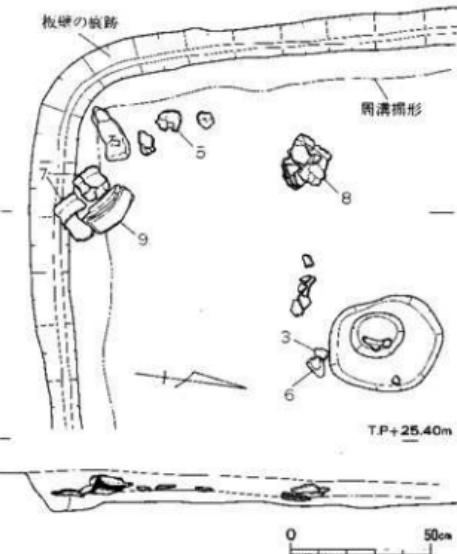
覆土：地山の小礫を含む黒褐色土である。約5cmの厚さで残存していた。南西コーナー付近より、比較的多くの遺物が出土した。

周溝：幅25cm前後、深さ10~15cmを測る。住居跡1と同様、板壁の痕跡が明瞭に観察された。すなわち、覆土を掘り下げた段階において、幅11~16cmの溝が周壁に沿うように検出され、さらに貼床を除去したところ、周壁に沿って幅25cm前後の掘形が検出されたことから、前者を板の痕跡、後者を掘形と認識したものである。

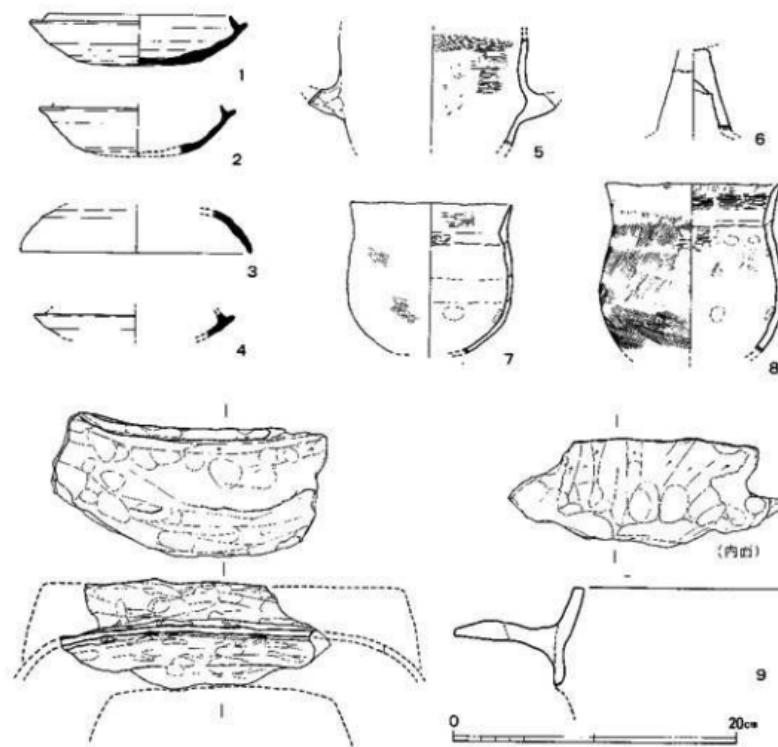
柱穴：4本柱の柱穴と考えられ、うち1カ所を検出した。長径40cm、深さ30cmで、直径15cmの柱痕が認められた。

貼床：床面全体には施されず、西辺と南辺の周溝に沿う幅60cmの範囲において認められたものである。今回検出した住居跡の全体の傾向として、貼床は住居中央部に付近に施される場合は少なく、周溝に沿って認められる場合が多い点が指摘される。

出土遺物（第26図）：検出範囲の南側から集中して出土したものである。出土レベルから覆土の上層と下層に分離できるが、時期的にはそれほど大差ないものとみられる。1、2は検出範囲の東側、周溝に近い覆土上層から出土した須恵器の杯身である。1は受部径15.4cm、器高3.6cm。2は受部径13.8cm、残存高3.5cm。いずれも比較的浅い体部から、受部が斜め上方に引き出され、短い口縁部が斜め上方にゆるく立ち上がる。底



第25図 竪穴式住居3 遺物出土状況（1:20）



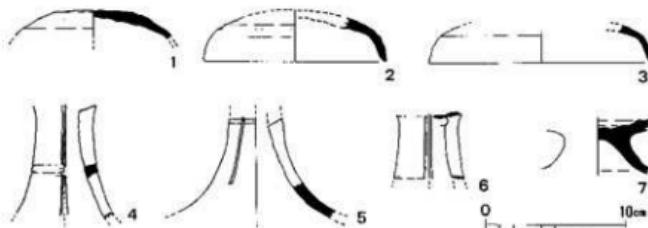
第26図 整穴式住居3 出土遺物 (1:4)

部外面の回転ヘラケズリは、1が約5分の4の範囲に、2が約5分の3の範囲に施され、それ以外は回転ナデ調整である。色調はいずれも外面が濃い灰色、断面がセピア系を見し、同時に同じ窯で焼かれたものである可能性が高い。受部径および口縁部の特徴から、第II型式4段階頃に対応するものとみられる。3～9は住居跡南西コーナー付近の床面(貼床上面)、および柱穴埋土中から出土したものである。3は杯蓋の破片で、推定口徑16.4cm、残存高3.0cm。天井部と口縁部を分ける段はなく、ヘラケズリとナデの境界がわずかに稜線を形づくる程度である。口縁部の傾きから、1、2とはほぼ同時期と見て差支えなかろう。4は柱穴から出土した杯身の小破片である。小破片ながらも1、2と同様な特徴を有する。5は上師器の壺と考えられ、推定最大径13.3cm、残存高7.8cmの小型品である。腹部中央に上向きの小さな把手が付されている。外面の調整は丁寧なナデ、内面は横方向のハケメおよびケズリである。6は土師器の高脚部

である。中空の脚部内面にはしばり痕や未調整の段が残るが、外面はナデもしくはハケにより平滑に整えられる。上部外面には1.6cmの幅で杯部の接合痕を残す。脚部は「く」の字に大きく外反する形態を呈するものと思われる。7、8は土師器の壇もしくは小型の甌とみられるものである。両者は大きさとプロポーションの点でやや異なるが、製作技法や胎土で概ね共通する。7は口縁部径11.4cm、推定高11.0cmで、丸い体部からわずかに外反する口縁部を有する。全体に摩滅が著しく正確には分からぬが、体部外面はハケ、口縁部内面は横方向のハケ、体部内面はナデ調整が施されているものと推定される。体部内面には接合痕が観察されるが、口縁部と体部との接合痕はほとんど消されず、段として残る点に特徴が見出だされる。8は口縁部径12.8cm、推定高23.4cm。7と同様、体部外面はハケ、内面は口縁部を中心に横方向のハケが施される。口縁部と体部の接合痕も段として明瞭に残る。9は土師器の甌である。付け底形式のもので、上部前面の底部、口縁部、炊き口部を含む破片とみられる。残存部が少なく、正確な大きさはわからぬが、他の例を参考にすると、概ね口縁部径25cm前後を測るものと推定される。底の幅は最大8.3cmで、内湾しながらやや上向きに付けられるものと推定される。口縁部は内傾しながら直立に立ち上がり、端部は横方向のナデにより平坦につくられる。炊き口部は端部の残りが悪く、図のように短く終わるタイプか、現端部を擬口縁とみなし、ここからさらに前面に向かって張り出す炊き口部を有するタイプかのいずれかであろう。いずれにせよ付け底の形態などから7世紀を前後する時期のものと考えられ、伴出した須恵器の時期とも矛盾するものではない。

竪穴式住居4 調査区の南端部で、わずかに検出できた住居跡である。周溝の北辺の一部に相当し、検出長3.1mを測る。周溝は幅18cm前後、深さ約5cm。住居の覆土は暗褐色粘質土で、とくに遺物の出土はみられなかった。

溝1 調査区の東側で検出した、幅50~65cm、深さ15~27cm、検出長4.5mの溝である。住居1と重複し、土層断面から見る限り、溝1が新しいと推定される。覆土は概ね2層に分かれ、上層に暗褐色土、下層に灰褐色土の堆積がみられた。このうち上層からは、比較的多くの遺物



第27図 出土遺物 (1:4)

が出土したが、それらが示す時期は、遺構の重複関係と同様、住居跡3よりも後出の特徴を有するものであった。この溝は調査区内において途切れていることや、検出範囲内において底部レベルにほとんど変化がないことなどから、排水だけを意図して掘り込まれたものとは考えがたい。集落内の区画などを目的としたものであった可能性があるが、同時期に所属する他の遺構が検出されず、今後の調査に委ねたい。

溝1からの出土遺物としては、須恵器の杯蓋、および高杯脚部がある(第27図2、7)。2は杯蓋の破片で、口縁部径約13cm、推定高2.7cm。天井部と口縁部を分ける段は明瞭ではなく、比較的新しい特徴を帯びる。7は無蓋の短脚高杯の脚部と思われ、現存高4.0cm、脚柱部の径4.7m。2よりも新しい特徴を有し、第Ⅲ型式1~2段階頃に対応するものとみられる。

据立柱建物1 調査区の南側で検出した建物跡である。東西2間(4.55m)、南北1間(2.05m)以上の規模を有する。柱穴は直径30~40cm、深さ20~30cmで、2カ所の柱穴において明瞭な柱痕が認められた。埋土中より13世紀代頃と推定される瓦器片が出土したことから、上部包含層と同じく、中世に属するものと考えられる。

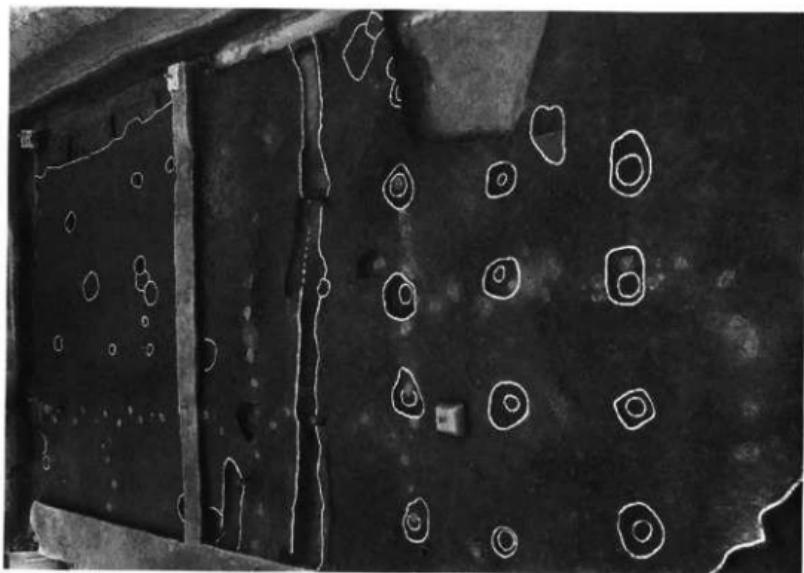
据立柱建物2 調査区の南側において、建物1と重なるように検出された。東西3間(5.1m)以上、南北1間(1.7m)以上の規模を有する。柱穴は直径30~40cm、深さ20~30cmで、底部レベルにはほとんど差は認められなかった。柱穴の規模と埋土の共通性から、建物1と前後して營まれたものであろう。

4. ま と め

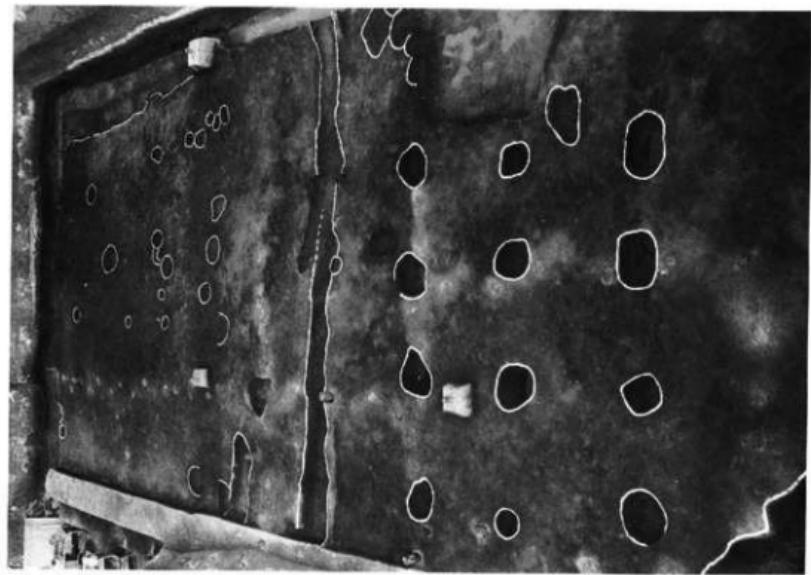
近年、螢池駅周辺では大阪モノレール建設工事に伴い、側大阪文化財センターによる発掘調査が継続的に実施され、その結果螢池東遺跡は、古墳時代前期末から平安時代にかけての集落が長期にわたって営みつけられた、市域でも有数の集落遺跡と推定される。

センターによる調査は現在も進行中であり、検出された遺構、遺物の具体的な内容については将来の報告に委ねられねばならない。しかし、今回の7次調査で得られた成果を積極的に活用する立場からすれば、当遺跡においては6世紀後半から7世紀初め頃にも集落が確実に存在し、しかも住居構造において、竪穴式住居の形式が採用されている点に特徴を見出だすことができる。検出された住居跡は方形プランを基調とし、4本柱で上屋を支え、床面に炉、周間に板壁を設けるというよう、前後の時代と比べてもとくに大きな差異は認められない。その性格については、今後螢池東遺跡における集落の変遷過程の中で位置付けられねばならないが、同時期の他集落における住居構造の採用の実態とも合わせて考察を進める必要があろう。なお、今回新たに判明した事実として、奈良、平安時代に統く13世紀代の集落の一角を明らかにした点も特記しておきたい。

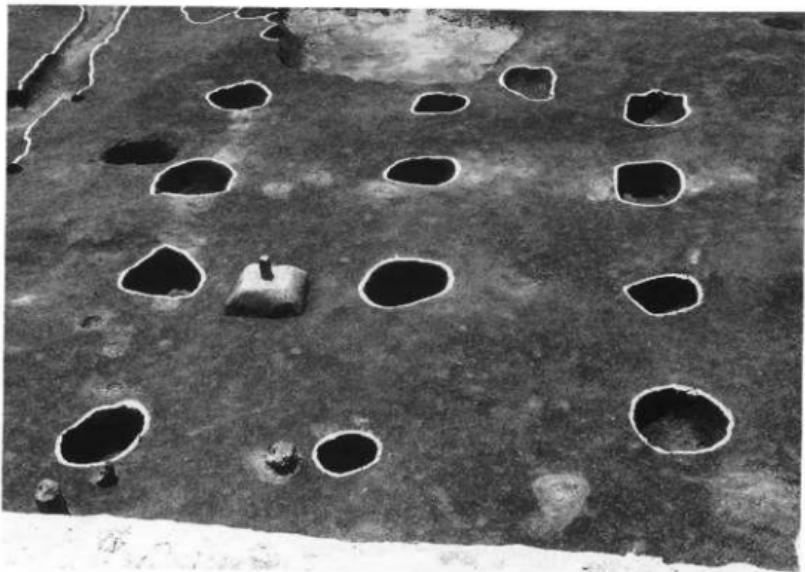
図 版



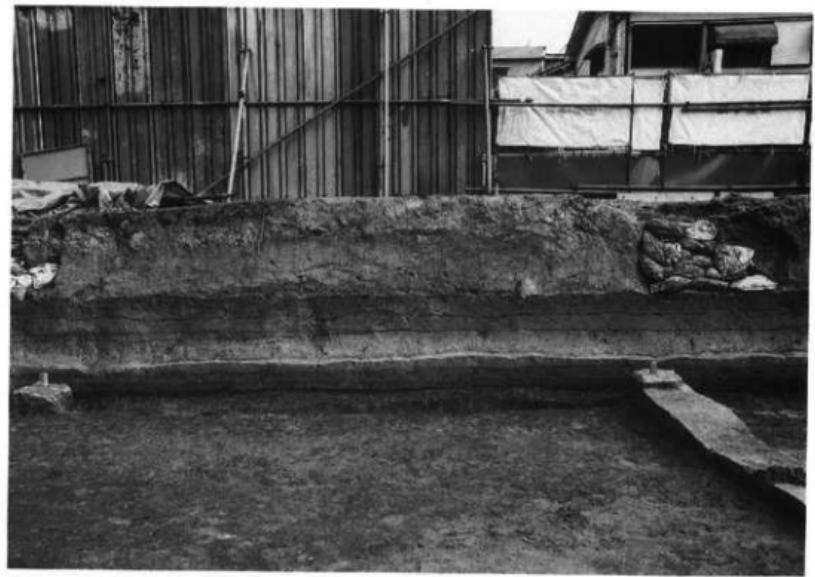
(1) B区遺構検出状況（西から）



(2) B区遺構完掘状況（西から）



(1) 挖立柱建物1（北から）



(2) 土層断面



(1) A区全景（北から）



(2) 溝2（西から）



第11図-7



第11図-2



第11図-14



第11図-10



第10図-7



第10図-7



1



3



5



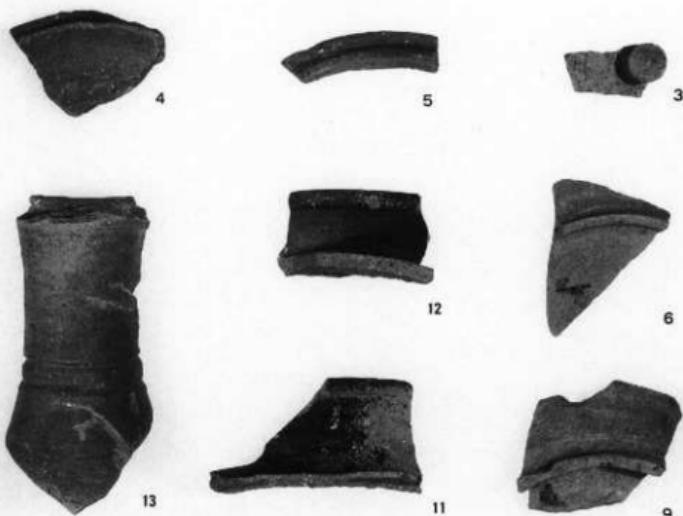
2



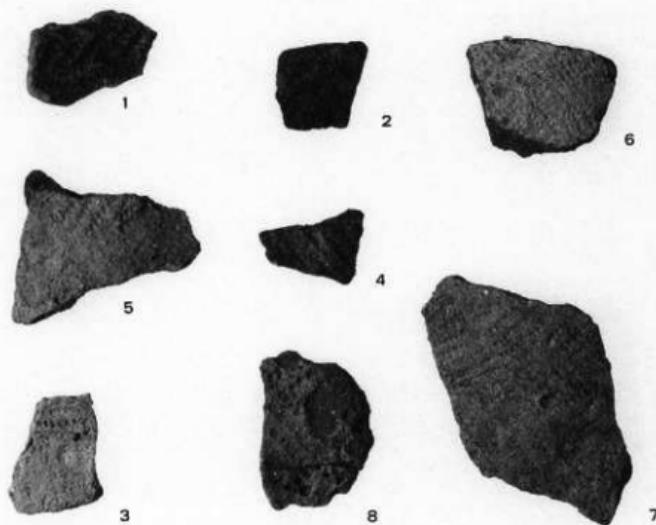
6

遺構出土遺物（番号は第10図に対応）

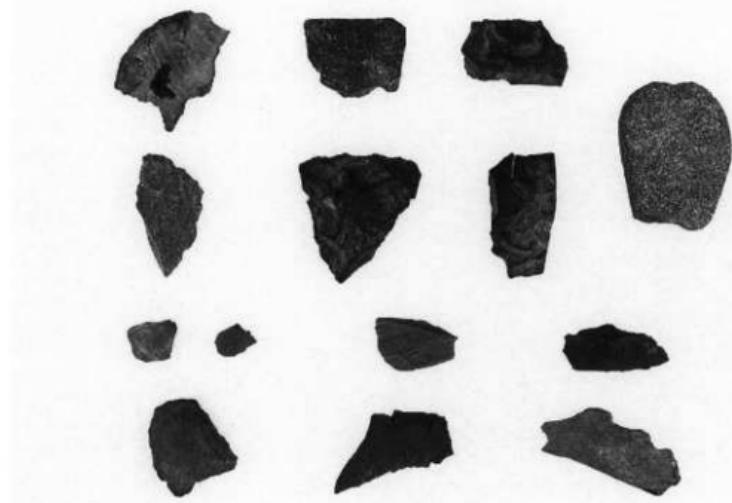
図版5 服部遺跡第2次調査地点出土遺物



(1) 包含層出土遺物（番号は第11図に対応）



(2) 縹文土器（番号は第12図に対応）



(1) 石器



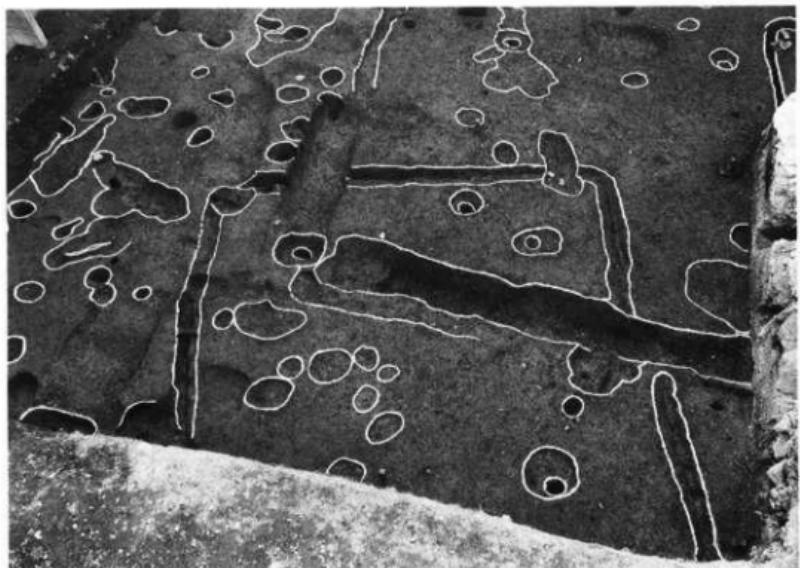
(2) 石器



(1) 遺構検出状況全景（西から）



(2) 遺構完掘状況全景（西から）



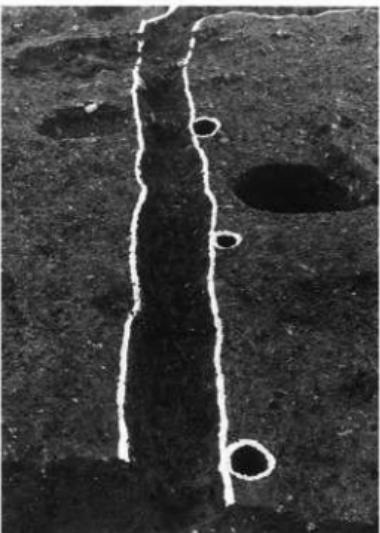
(1) 壁穴式住居 1 全景（西から）



(2) 同 貼床除去後（西から）



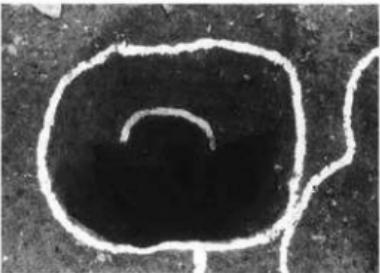
(1) 積穴式住居1 周溝内板壁の痕跡



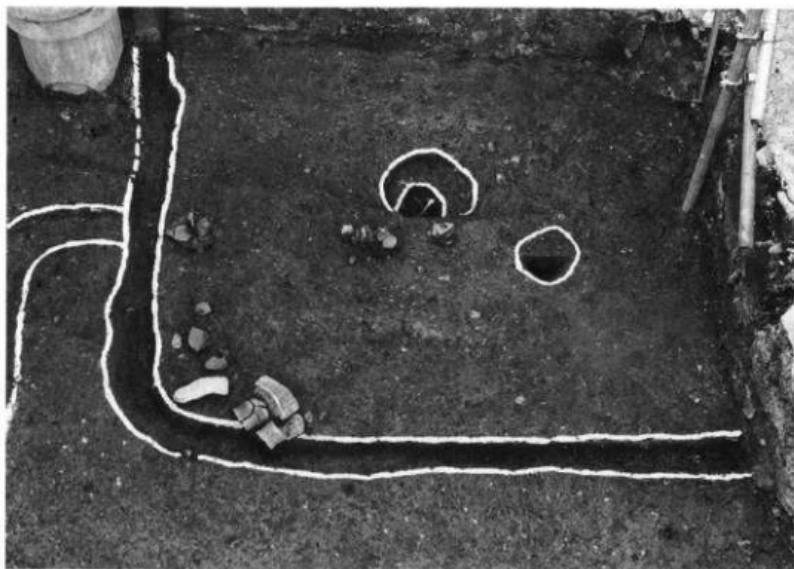
(2) 同 周溝と杭列



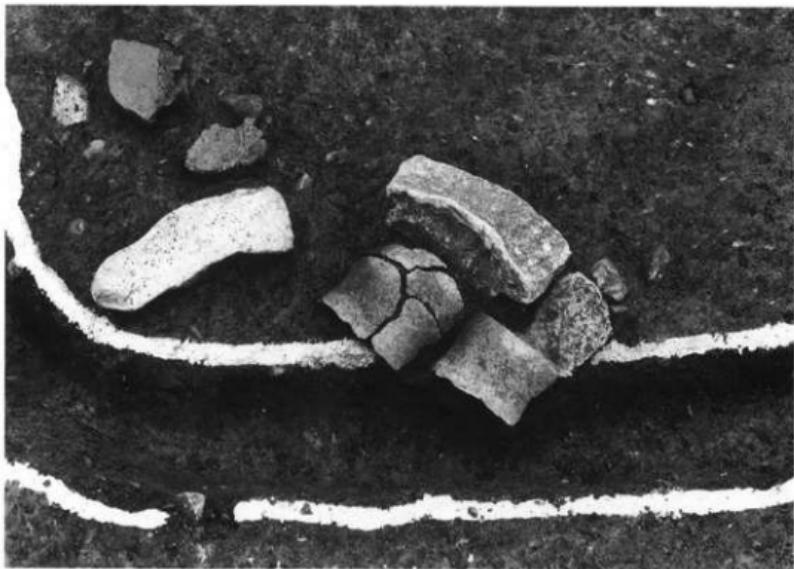
(3) 同 須恵器杯身出土状況



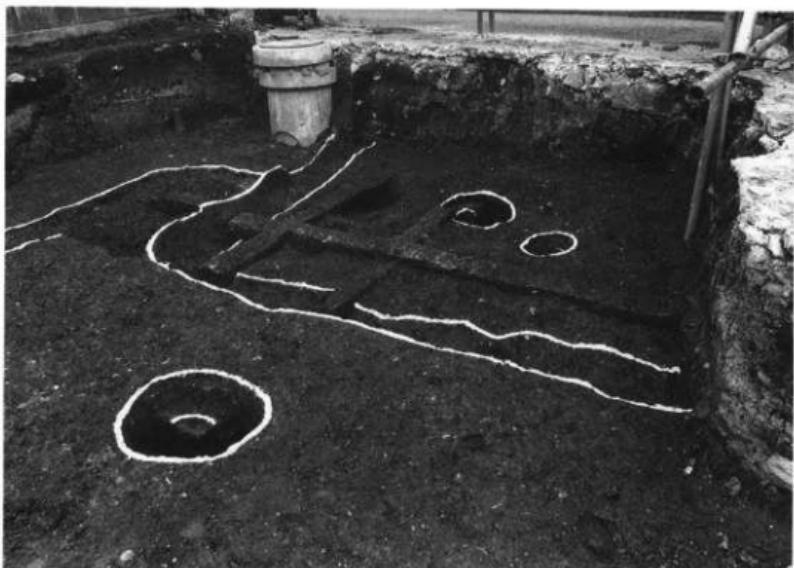
(4) 同 柱穴断面



(1) 壁穴式住居 3 全景 (南から)



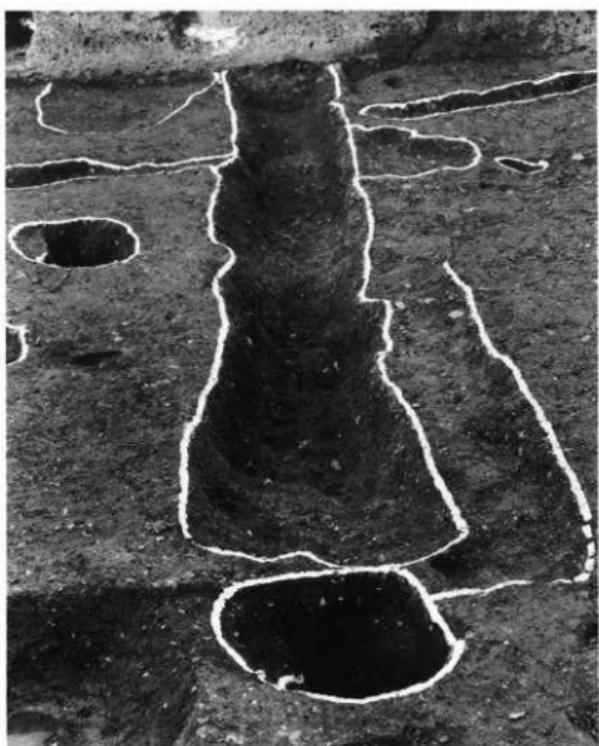
(2) 同 遺物出土状況



(1) 壁穴式住居 3 覆土断面（西から）



(2) 同 贼床断面（南西から）



(1) 溝1全景（南から）



(2) 溝査区南壁土層断面



第23圖－3



第26圖－1



第26圖－7



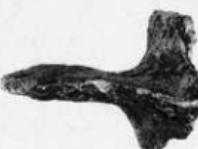
第26圖－8



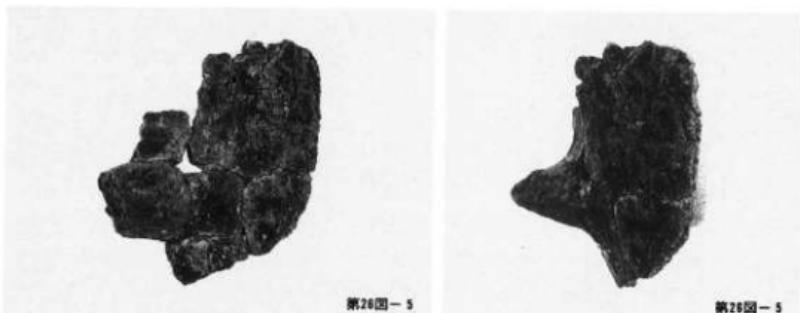
第26圖－9



第26圖－8

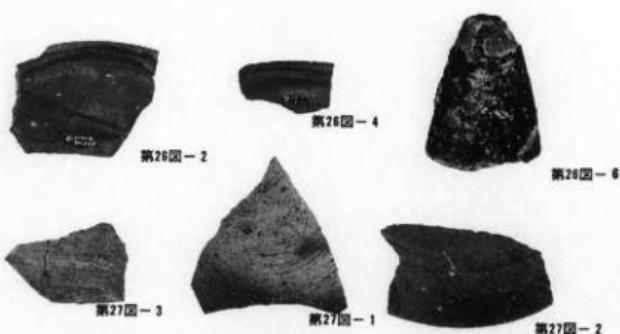


第26圖－9



第28图- 4

第28图- 5



第27图- 1

第27图- 2

第27图- 3

第27图- 4

第27图- 5

第27图- 6



第27图- 7

豊中市文化財調査報告第34集

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1994（平成6）年3月

発行 豊中市教育委員会

豊中市中桜塚3丁目1-1

編集 社会教育課文化財保護係

印刷 やまかつ株式会社